読んだ読んだ「益工産」読み取りの足跡

一組　七場面

作者は、寂しさを表現するために「一人」を「独り」と書いた。また、最後に客の前で痰を吐くような行儀の悪い車掌を登場させることによって、待ってくれない時間を表現した。そして主人公と父親が別れにくさを振り切るために、行儀の悪い男車掌がせかすという設定にした。

永田君

父親が帰るときに、独りで停留所まで送ったとき、帰りには自分一人になってしまってでも、少しでも長く父親と一緒にいたいことが分かる。それからまた、黙って歩いた、というところでは、もっとしゃべりたいのにお互いに言い出せない不器用な二人を描いている。それに、父親の右手でこちらの頭をわしづかみにしてとかのところでは、父親の、ことばではない愛情が分かる。「えんびフライ」と言ってしまったのは、楽しい日々を思い出しているからだろう。作者が男車掌を登場させたのは、楽しい日々との別れと、現実と向き合わなければいけないということを分かりやすく設定したかったからだろう。

岩村君

主人公は、父親と二人きりで停留所に着いた場面で、父親にいつもより手荒く頭を揺さぶられて、少し戸惑った主人公は、つい、「えんびフライ」と言ってしまった。本当は「さいなら」と言いたかったのだけど、なんだか恥ずかしくて、言うことができなかった。父親は、主人公の口からそんな言葉が出てくるなんて思っていなかったので、驚いたが、まだまだかわいい子どもなんだなと思い、「わかってらあに、また買ってくるすけ」と答えた。作者は、まだ主人公に伝えておきたいことがありそうな父親の前に男車掌を登場させた。このように設定することによって、父親との別れが主人公にとって、とても悲しいということが伝わった。

白木さん

作者は、感動の別れをしている最中、下品な男車掌を登場させた。でも、それは、悪いことではなく、なかなか別れようとしない父親と主人公をいい意味でぶった切ったのだと思う。男車掌の下品で野太い声という設定は、男車掌が「また会えるから、ここは割り切って早く乗れ」といわんばかりで、だからこそ、父親と主人公の会話を切ったんだと思う。

籔さん

作者は、父親との別れの場面で、主人公と停留所まで行くまであまり話をしていないような場面にしたのは、この場面は、最後の場面であって父親とは半年後にしか会えないので、あまり話をせず、全体のイメージをあえて暗くなるように設定した。また、最後に男車掌を登場させることで、父親と主人公が、本当に別れないといけないことを表している。最後の文の「はい、発車あ」と野太い声で言うところも、主人公のお別れだから、あまり寂しい思いにならないように男車掌を野太い声にしたのだと思う。

小川さん

作者は、父親を終バスに乗せたり、主人公を独りにさせたりといろいろと表現している。

父親が頭をわしづかみにして、いつもより手荒く揺さぶったのは、「いつもすまないなあ」という感情と「祖母と姉を頼む」という感情が絡み合って、言葉だけではなく行動で伝えたかったからである。

また、主人公に「えんびフライ」と言わせたのは、父親との思い出で、すごく印象に残っていたから、すごく幸せだったからである。

こんな親子がすぐに別れられるはずがなく、また、とても大切な別れだと言うことを強調するために、あえて男車掌を登場させ、無理にでも別れさせようとしている。永田君の言葉を借りれば、男車掌は、非常な時間の象徴であり、それを登場させて、別れさせようとしている。

岩田さん